自己受容性と対人態度との関わりについて¹

板 津 裕 己

BASIC RESEARCH ON THE RELATION BETWEEN SELF-ACCEPTANCE AND INTERPERSONAL ATTITUDE

Hiromi ITATSU

The aim of this study was to investigate the relation between self-acceptance and interpersonal attitude. Self-acceptance was measured with Self Acceptance Scale (SASSV, Itatsu, 1989, 1993), and interpersonal attitude was done with Interpersonal Attitude Inventory (IAI, Kato & Takagi, 1980) and Interpersonal Relations Inventory (IRI, Fukuyama, 1981). Subjects were 391 male university students. Close relationships were found between many subscales and indices of SASSV, and subscales on IAI and IRI. Every subscale and Basic Trait (Secondary Factor) on SASSV had a close relation with different aspect on interpersonal attitude. Subjects who accepted their own self had a friendly attitude toward others. From the results mentioned above, a hypothesis was built up willing that each trait or factor of self-acceptance had a close relation with specific aspect on interpersonal attitude. DBS (Distance Balance Score), which was one of the indices of SASSV, was related to discrepancy scores on IRI. This result meant that inner balance of self-acceptance contributed to disparity between self-attitude and attitude for others.

Key words : self-acceptance, self-attitude, attitude for others, interpersonal attitude.

問 題

これまでに、自己受容性と他者受容性、社会適応性や対人態度・対人行動との関係について、多くの臨床的・調査的研究がおこなわれてきた。そして、それらの研究では、適度に自己受容している人は対人関係が円滑に進められ、他者を受け容れることができること(名城, 1961; 加藤, 1977)、カウンセリングやグループセッションの進行にともなって自己受容度が増すとともに他者受容度も増大していくこと (Sheerer, 1949; Smith, 1980) など、自己受容することが、積極的で良好な対人関係の構築に寄与することを明らかにした。

そして、このような結果が得られることについて、(a)適度に自己受容している人は、自己への信頼感が他者への信頼感に繋がる、これが、その人の他者への肯定的態度の基盤になっているのではないか(田中, 1988)、(b)自己受容性は、他者を自己と同一視する機能を持っているのではないか、そのため、自己受容している人は、他者に対しても受容的になるのであろう(式部, 1983; 岩下, 1988)、(c)自己受容している人は、自己探究から解放される、それにともない、自己の外側に関心を向けることができるようになる(Walter, 1977)などの考察がおこなわれている。

上述したような特徴を有することから、今日、自己受容性は、生きていることを実感し、自己のもてる能力を発揮している状態である心理的健康の指標の1つ

¹ 駒澤大学文学部 (Faculty of Literature, Komazawa University)

に数えられている (Jahoda, 1958 : 上田, 1969)。しかしながら、その一方で、極めて高い自己受容 (過剰自己受容) 状態にある人は、適度な自己受容状態にある人と比べて、必ずしも良好な対人関係をとることができないことも指摘されている。これについて、過剰自己受容は、自己不信に対する防衛的態度のあらわれであり、必ずしも心理的に健康な状態をあらわすものではないと考えられている (Block & Thomas, 1955)。

この過剰自己受容状態に指摘されるように、自己評定による自己受容度は、十分な妥当性や信頼性をもたない場合があるとして、自己受容度から心理的健康度や対人態度などを予測することには限界があると考えられている。しかしながら、特に自己受容性を質問紙でとらえようとする研究では、もっぱら自己受容尺度合計点を自己受容度にあてる測定法に問題があるように思われる。そして、もしこのような測定法に問題があるならば、尺度合計点に代わる、あるいは、これを補佐する指標を設けることで、心理的健康などの指標としての自己受容性の有効性が増すことが考えられる。

また、自己受容性の構造的な研究は、これが単一概念ではなく、諸概念の複合的構成体であることを明らかにした。そして、いくつかの自己受容尺度では、他者との関わり方に関連する因子を設定している (Mitchell, 1962 ; 宮沢, 1979 ; 大出・沢田, 1988)。それならば、自己受容性の構成概念のうち、他者との関わり方に関する因子と対人態度、対人行動や他者受容性との関連について検討していく必要もあろう。

板津 (1986b) は、自己受容尺度 (板津, 1986a, 以下 SASR と記す) を自己受容性の指標に、濱口 (1982) の対人関係観尺度を対人態度の指標に用いて、これら間の関係について検討した。

そこでは、良好な自己受容状態にある人は、(a)対人場面において、自己の立場をはっきりとさせた上で他者の立場を尊重すること、(b)対人関係を自分の利益中心に考えないこと、また(c) SASR の下位尺度レベルでは、対人場面での自己受容性因子が、対人態度と最も強い関連性を示すとの結果を得た。それとともに、従来指摘されている過剰自己受容について、非常に高い自己受容状態にあるグループ (上位約 7%) では、自己中心の傾向が強まるという結果も得た。そして、このような態度が円滑な対人関係の構築に影響を与えているのではないかと指摘をおこなった。

上記の研究では、SASR 尺度合計点を自己受容性の指標にしている。この研究の後、板津は、上述のように自己受容性が単一概念でなく複合的構成概念である

ことに着目し、下位尺度得点バランス値 (Distance Balance Score, 以下 DBS と記す) を指標に加えた自己受容尺度短縮版を作成した (板津, 1989, 1993, 以下 SASSV と記す)。このほか、SASSV では、5 下位尺度の上位因子に相当する基調特性 (特性 I : 自己の行為・行動への受容的態度, 特性 II : 自己の行動基盤となる内面的な安定感) も設けた。

本研究は、新たに SASSV を用い、自己受容性と対人態度との関連について検討をおこなうことを目的とする。

方 法

被験者 被験者は男性大学生 391 名であった。

尺度 本研究では、以下の尺度を用いた。

a. 自己受容尺度 (SASSV, 板津, 1989, 1993)

5 因子・25 項目の 5 段階自己評定法尺度。尺度合計点、下位尺度得点、DBS のほか、5 因子のおおもとに相当すると考えられる 2 基調特性 (上位因子) の因子スコアを算出する。さらに、上記の数値指標をもとに、尺度合計点と DBS の 3 群別評価、基調特性 5 群別評価、合計点と DBS 各 3 群別評価を組合わせた 9 群別評価、さらに、9 群別評価の各群の特徴をもとに再整理した 4 群別評価をおこなう (以下、これらを評価指標と記す)。SASSV の概略は、付録の項を参照のこと。

また、各評価指標を構成する下位群の群別の被験者数は TABLE 1 のとおりであった。

TABLE 1 SASSV 評価指標構成下位群別被験者数

	構成下位群				
	高得点群	中位群	低得点群		
尺度合計点	140	175	76		
n					
DBS	バランス群	中位群	アンバランス群		
n	145	146	100		
基調特性	A 群	B 群	C 群	D 群	E 群
n	134	64	86	78	29
9 群別評価	第 1 群	第 2 群	第 3 群	第 4 群	第 5 群
n	56	55	29	68	63
	第 6 群	第 7 群	第 8 群	第 9 群	
n	44	21	28	27	
4 群別評価	第 I 群	第 II 群	第 III 群	第 IV 群	
n	56	84	175	76	

b. 対人態度尺度 (加藤・高木, 1980, 以下 IAI と記す)

4 尺度・20 項目で構成される 5 段階自己評定法尺度。4 下位尺度は、尺度 1 : 信頼・愛情, 尺度 2 : 対立, 尺度 3 : 同調・依存, 尺度 4 : 孤独である。

c. 対人関係テスト (福山, 1981, 以下 IRI と記す)

受容-拒否, 接近-回避の2軸によって仕切られた4領域(見守り, 密着, 批判, 諦め)と, これら4領域を構成する8カテゴリー(観察, 配慮, 期待, 一体感, 攻撃, 干渉, 妥協, 閉鎖)について, 対自己: 私自身に対する私の態度(以下 SA と記す), 対他者: 他者に対する私の態度(同 AO), 他者からの自己: 他者の私に対する態度(同 FO)の観点から対人態度をとらえていく。各観点40項目, 合計120項目の5段階自己評定法尺度。本研究では, 上記4領域得点と各領域の3観点差異点を指標に用いた。以

後, 本文, および TABLE では, 対自己と対他者の差異点を D(SA-AO), 対自己と他者からの自己の差異点を D(SA-FO), 対他者と他者からの自己の差異点を D(AO-FO) と略記する。

IRI を構成する2軸, 4領域と8カテゴリーの位置関係については, 付録の項を参照のこと。

結 果

SASSV 得点と IAI 下位尺度得点, IRI4 領域得点および差異点との相関値は, TABLE 2 のとおりであった。

TABLE 2 SASSV と IR, IRI の相関関係

	Fac. I ^a	Fac. II ^b	Fac. III ^c	Fac. IV ^d	SASSV Fac. V ^e	尺度合計点	DBS ^f	特性 I ^g	特性 II ^h
IAI									
信頼・愛情	.554***	.469***	-.032	.133**	-.117	.395***	.083	.538***	.039
対立	.081	-.102	-.536***	-.047	-.206***	-.279***	.046	-.043	-.431***
同調・依存	-.201***	-.078	-.267***	-.518***	-.095	-.424***	-.023	-.271***	-.456***
孤独	-.100	-.542***	-.161**	-.430***	-.178***	-.507***	.124**	-.475***	-.391***
IRI SA									
見守り	.317***	.479***	-.014	.125	.080	.360***	-.139**	.470***	.091
密着	.357***	.455***	-.079	.016	.046	.270***	-.156**	.424***	-.034
批判	.018	-.210***	-.301***	-.210***	-.135**	-.298***	-.015	-.166***	-.347***
諦め	-.173**	-.370***	-.315***	-.210***	-.149**	-.439***	.044	-.354***	-.365***
IRI-AO									
見守り	.358***	.372***	.033	-.030	-.079	.256***	-.131**	.353***	-.008
密着	.132	.266***	-.266***	-.160**	-.088	-.033	-.009	.167**	-.261***
批判	.081	-.101	-.573***	-.113	-.205***	-.317***	.110	-.054	-.490***
諦め	-.162**	-.440***	-.153**	-.492***	-.141**	-.503***	.114	-.457***	-.401***
IRI-FO									
見守り	.471***	.272***	.013	.092	-.077	.301***	.183***	.389***	.045
密着	.272***	-.107	-.445***	-.234***	-.224***	-.248***	.189***	.001	-.475***
批判	-.155**	-.405***	-.306***	-.632***	-.090	-.586***	.100	-.443***	-.564***
諦め	-.292***	-.424***	-.160**	-.566***	-.115	-.571***	.100	-.526***	-.433***
D(SA-AO)									
見守り	.094	-.086	-.135**	-.116	-.092	-.114	.334***	-.039	-.175***
密着	.083	-.012	-.109	-.053	-.029	-.041	.335***	.024	-.111
批判	.071	-.059	-.165***	-.103	-.073	-.115	.357***	-.027	-.184***
諦め	-.044	-.189***	-.101	-.267***	-.055	-.239***	.345***	-.192***	-.226***
D(SA-FO)									
見守り	.084	.073	.014	.067	-.020	.085	.333***	.091	.042
密着	.178***	.111	.038	.072	.027	.157**	.314***	.173***	.066
批判	.023	-.079	-.077	-.181***	-.061	-.133**	.416***	-.082	-.162**
諦め	-.017	-.096	-.073	-.245***	-.126	-.193***	.373***	-.145**	-.201***
D(AO-FO)									
見守り	.056	.011	-.091	-.080	.030	-.032	.343***	.031	-.098
密着	.166***	.086	-.030	.058	-.002	-.105	.341***	.147**	.006
批判	.026	-.129	-.043	-.227***	-.021	-.144**	.353***	-.108	-.156**
諦め	.044	-.006	-.120	-.167***	-.028	-.101	.396***	-.018	-.172***

** p<.01, *** p<.001

a : 生き方, b : 他者との関わり方, c : 情緒不安定でないこと, d : 自信・自己信頼に欠けていないこと

e : 自分自身への満足感, f : 下位尺度得点バランス値 (Distance Balance Score), g : 自己の行為・行動への受容的態度, h : 自己の行動基盤となる内面的な安定感

SASSV 得点と信頼・愛情を除く IAI 3 下位尺度得点には、多くの対で負の相関関係が認められた。また、信頼・愛情との間では、いくつかの対で正の相関関係にあった。

SASSV 得点と IRI の SA, AO, FO 各 4 領域得点との間には、見守りと密着で正の、批判と諦めでは負の相関関係を示すものが多い。また、IRI 差異点では、DBS との間のすべての対で正の相関関係が認められた。これに対して、ほかの SASSV 得点では、有意水準に達する相関関係にあるものが少なかった。

TABLE 3 は、SASSV 評価指標構成下位群ごとの IAI, IRI 各得点の分散分析結果である。ここでは、多くの組合わせで有意な差のあることが見いだされた。そのうち、尺度合計点と基調特性は、IAI や IRI の SA, AO, FO で有意な群間差が認められるものの、IRI 3 差異点では明確な群間差を示さない。これらに対して、DBS は、むしろ、3 差異点において群間差が顕著になる傾向にあった。

このような群間差は、IAI では、SASSV 各評価指標とも、信頼・愛情においては、より自己受容的な群が高得点を取り、ほかの 3 下位尺度では、逆に、自己受容的でない群の方が高得点をとるために生じたものである。

また、IRI での群間差は、見守りと密着において、より自己受容的な群の得点が高くなること、批判と諦めでは、逆に自己受容的でない群の方が高得点をとることに拠る。さらに、IRI 3 差異点では、およそ、各評価指標においてより自己受容的な群の値が小さくなる傾向にあった。そのなかで、9 群別評価の第 3 群(高得点—アンバランス群)や第 6 群(得点中位—アンバランス群)は、それぞれの下位に位置するバランス群やバランス中位群と比べて、差異点が大になるものが多い。この傾向は、3 差異点 4 領域のうち 11 組で、合計点中位のバランス群やバランス中位群より差異点が大になる第 3 群で顕著であった。

TABLE 4 は、SASSV 尺度合計点高得点群について、4 群別評価と 9 群別評価の観点から再分類した 2 群間の IAI, IRI 各得点の差の検定結果である。4 群別評価では、第 I 群(高得点—バランス群)と第 II 群(高得点—バランス群以外の高得点群)について、9 群別評価では、第 1 群(第 I 群と同じ)と第 3 群(高得点—アンバランス群)について比較検討した。これらのうち、IAI 下位尺度得点や IRI の SA, AO, FO 各 4 領域得点では、ほとんどの対で第 I 群と第 II 群、第 1 群と第 3 群の得点に有意な差が認められなかった。一方、IRI 3 差異点では、それ

ぞれの 2 群間の差異点に有意差を示すものが多かった。そして、いずれの対も、より良好な自己受容状態と考えられる第 I 群や第 1 群の差異点の方が小さかった。また、これらの群間差は、4 群別評価の第 I 群と第 II 群の間に見いだされる差よりも、9 群別評価での 2 群間の差において一層明確になる傾向にあった。

TABLE 3 SASSV 評価指標構成下位群の IR, IRI 得点差 (分散分析)

	SASSV 評価指標				
	尺度合計点	DBS	基調特性	9 群別評価	4 群別評価
IAI					
信頼・愛情	25.72***	0.63	26.17***	6.84***	17.62***
対立	14.54***	0.65	11.06***	3.89***	10.63***
同調・依存	34.82***	0.04	23.12***	11.00***	24.31***
孤独	48.92***	4.73**	25.50***	12.66***	32.51***
IRI—SA					
見守り	19.02***	0.68	24.01***	2.38*	2.72*
密着	10.49***	0.43	20.12***	2.79*	2.76*
批判	18.23***	1.52	11.54***	3.03**	6.22***
諦め	42.14***	1.79	7.01***	5.88***	14.71***
IRI—AO					
見守り	11.43***	0.40	10.91***	2.44*	3.48*
密着	0.70	1.51	33.14***	1.00	0.69
批判	23.51***	0.98	18.59***	6.83***	26.62***
諦め	45.32***	0.23	8.91***	11.63***	29.27***
IRI—FO					
見守り	16.08***	7.33***	15.01***	4.07***	5.12**
密着	10.00***	8.90***	40.42***	3.57***	2.92*
批判	75.42***	3.09*	33.12***	16.28***	40.51***
諦め	62.05***	2.53	8.72***	15.36***	39.27***
D(SA—AO)					
見守り	3.50*	20.39***	2.04	5.90***	5.34**
密着	2.00	20.71***	5.05***	5.42***	3.83*
批判	1.86	20.24***	3.01*	5.86***	3.46*
諦め	9.60***	21.31***	4.83***	6.88***	6.73***
D(SA—FO)					
見守り	2.26	18.85***	1.18	7.45***	6.21***
密着	11.05***	15.80**	3.03*	5.74***	5.05**
批判	4.16*	30.33***	0.66	9.20***	3.25*
諦め	7.04***	21.47***	0.56	6.84***	4.75**
D(AO—FO)					
見守り	0.81	18.44***	1.14	5.26***	3.76*
密着	7.43***	20.16***	2.29	6.12***	4.10**
批判	3.21*	20.78***	1.07	6.65***	3.95**
諦め	1.47	26.19***	1.68	7.19***	2.90*
自由度	2,388	2,388	4,386	8,382	3,387

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

TABLE 4 SASSV 尺度得点高得点群内の IAI, IRI 得点群間差 (t 検定)

	4 群別評価			9 群別評価	
	第 I 群 第 II 群間差 ^a	第 I 群 第 III 群間差 ^b		第 I 群 第 II 群間差 ^a	第 I 群 第 III 群間差 ^b
IAI			D(SA-AO)		
信頼・愛情	1.21	1.40	見守り	3.36**	2.98**
対立	0.54(137)	0.56(39)	密着	3.14**(137)	4.35*** (35)
同調・依存	1.78(137)	1.12(39)	批判	2.22*	2.50* (85)
孤独	0.35	1.12	諦め	2.50*	2.47*
IRI-SA			D(SA-FO)		
見守り	0.21	0.23	見守り	2.09*	3.01** (43)
密着	1.18	1.50	密着	1.70*	3.42***
批判	0.66	1.54	批判	1.64	2.64* (43)
諦め	0.70	0.15	諦め	2.76**	2.80**
IRI-AO			D(AO-FO)		
見守り	0.99	2.29*	見守り	2.43*	2.64* (43)
密着	1.45(137)	0.86(35)	密着	1.92*	2.72**
批判	1.42	1.26	批判	2.37*	2.37*
諦め	0.97	2.31*	諦め	2.20*	2.67**
IRI-FO			df	138	83
見守り	0.99	0.89			
密着	0.21(137)	0.40(41)			
批判	1.14	1.48			
諦め	0.38	0.88			

+p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001

() は Welch's Method での df をあらわす

a : 高得点-バランス群とその他の高得点群との差

b : 高得点-バランス群と高得点アンバランス群の差

考 察

SASSV と IAI との関係から、自己受容的な人の特徴として、(a)他者に信頼・愛情をもった態度をとりやすいこと、(b)他者に対立したり他者に同調・依存的になったりしないこと、(c)対人場面であり孤独を感じないことなどが指摘できる。また、SASSV 基調特性レベルでは、自己の行為・行動への受容的態度(特性 I)と信頼や愛情との間に、そして、自己の行動基盤となる内面的な安定感(特性 II)と対立や同調・依存との間に密接な関係にあることが明らかになった。その一方で、特性 I と対立、特性 II と信頼・愛情の間には、きわめて弱い相関関係しか認められない。

これらのうち、特性 II と他者に同調・依存しないことや、他者に対立的であることとの関係は、自己の内面の不安定さへの苛立ちを他者に投影し、そのために、他者に対して否定的になったり、信頼できなくなるこ

とから生じたものと考えられる。すなわち、式部や岩下が指摘しているように、他者を自己の状態と同一視する傾向が、自己と他者のいずれも否定する方向に作用しているものと解釈できよう。

SASSV と IRI 4 領域得点との間では、SASSV の 2 基調特性と 5 下位尺度間に、共通する関係と相異なる関係のあることが見いだされた。このうち、ほぼ共通する傾向は、拒否の軸方向にある批判や諦めとの間に負の関係を示すことである。これに対して、受容軸方向の見守りと密着では、基調特性や下位尺度によって異なる傾向を示している。すなわち、生き方 (Fac. I)、他者との関わり方 (Fac.II) や特性 I は、受容軸方向、そして、諦めとの間に密な関係を有するものが多い。また、情緒不安定でないこと (Fac.III)、自信・自己信頼に欠けていないこと (Fac.IV) や特性 II は、受容軸方向の 2 領域との間に負の相関関係が認められるか、あるいは、極めて脆弱な相関関係を示すのみであった。その一方で、これらは、拒否軸の方向や密着との関係が深い傾向にあった。

このような SASSV と IRI との関係や、上述した SASSV と IAI との関係から、SASSV2 基調特性と 5 下位尺度のそれぞれが、対人態度において異なる役割を果たしており、しかも、それぞれがかなり特徴的な役割を分担しているのではないかという仮説がたてられる。すなわち、(a)基調特性レベルでは、特性 I の程度が他者への肯定的接近的態度に、特性 II は他者に対する否定的拒否的態度に寄与しているのではないか、さらに、(b)これらは比較的相互独立的に機能しているのではないかということが考えられる。そして、この仮説は、対人態度を受容-拒否、接近-回避の 2 軸を対立した概念上に考えるのではなく、受容的であるか否か、拒否的であるか否かに分けて考えると、より理解しやすくなるように思われる。

Fac.III, Fac.IV や特性 II は、IRI の AO や FO の密着と負の相関関係にあった。このような結果は、(a)密着の下位カテゴリーである期待と一体感が、依存的自己愛的傾向を意味すること、(b)自己の内面に安定感を感じる人の多くは、他者に依存したり密着する必要性を強く感じないこと、(c)自分自身が他者に依存する必要性を感じないため、他者もまた自己に対して同様であろうととらえやすいことなどに拠るものと考えられる。さらに、他者への態度では、IAI の同調・依存と一致していること、これらが AO と FO のいずれとも負の相関関係で一致していることも、自他の同一視に拠るものと考えられる。

このほか、SASSV でとらえられる自己受容性は、接近回避軸よりも受容拒否軸との関係が強く、さらに、この受容拒否軸においては、批判しない、諦めないという拒否軸との間に、より密接な関係があると言える。

SASSV 下位尺度得点のバランス状態をあらわす DBS は、IAI の下位尺度得点や IRI の SA, AO, FO, それぞれの 4 領域得点よりも、IRI 3 観点間の差異点と密な関係にあることが明らかにされた。このような差異点との関係は、ほかの評価指標には認められないことから、DBS の特徴の 1 つとすることができよう。

この IRI 差異点は、自己観や他者観の不一致度、あるいは、他者との関わりの中で生じる認識のずれをあらわしている。Fiedler, Blaisdell & Warrington(1952) は、好意的な感情を持つ他者に対しては、実際よりも自己と類似したものと認知する傾向があることを見いだした。このような傾向から、他者に好意的接近的な人は、自己態度、他者態度や他者の私に対する態度のうけとり方のずれがちいさくなることが予想される。

Fiedler ほかの見解に対して、本研究では、DBS アンバランス群に、私自身の私に対する態度(自己態度)、他者に対する私の態度(他者態度)や、他者の私に対する態度のうけとり方間のずれが大きくなる人が多く含まれることが見いだされた。このほかにも、DBS と IAI の孤独や IRI の FO との間に相関関係が認められたことから、SASSV 下位尺度得点がアンバランスな人、すなわち、DBS が高得点となる人は、他者に対して積極的・好意的感情をもたない、他者との間に距離を感じやすいと考えられる。さらに、その人の態度や行動は、対象をどのようにとらえるかによって決定される(Fiedler ほか)ことから、上述のような他者観を持つ DBS が高得点な人に、良好な対人態度の構築を阻害する要因が働いているものと推察できる。

SASSV の 9 群別評価、4 群別評価では、そのいずれとも、多くの IAI 下位尺度得点や IRI 4 領域得点において、構成下位群得点間に有意差が認められた。このような結果は、両評価指標が対人態度の弁別力をもつことをあらわしている。それとともに、尺度合計点が高得点であっても、他面で DBS も高得点となる群(アンバランス群)のなかには、IRI でとらえる自己態度、他者態度や他者の私に対する態度との間にずれの生じやすい人が多く含まれることも見いだされた。

したがって、SASSV 尺度合計点が高得点であっても、その内部バランスが良好でない人は、その人がおかれた状況によっては、他者との関わり円滑さを欠く

ことがあると推察できる。そして、このことは、尺度合計点のみを自己受容性の指標とした場合、高得点をとる人が必ずしも心理的社会的に良好な状況にあるとは言えないことをあらわしている。これらのことがらを視点を換えて表現するならば、自己の諸側面のすべてについて選り好みをすることなくありのままに受け容れることが、安定した自己や良好な対人態度の構築に寄与すると言えるだろう。

今後の課題

対人態度は、他者に対する一般的な態度であるのに対して、対人行動は、限定されたある特定の対象に生じるものである。また、態度は一定の反応傾向であって、反応そのものではない。このように、対人態度と対人行動には相違点があるが、その一方で、(a)態度は行動の可能性・準備状態をあらわし、行動を規定する内的要因の 1 つであること、(b)態度と行動の間には斉合的な関係があることなどを指摘されている。さらに、このような理由から、行動を観察する代わりに態度の測定をおこなうことから、当該状況であられるであろう行動を予測することができると考えられている(水原, 1984; 坂原, 1986)。

本研究では、自己受容性と対人態度について検討し、SASSV 尺度合計点、基調特性や下位尺度得点と対人態度間のみでなく、SASSV の DBS と対人態度との間にも関係があることが見いだされた。さらに、SASSV 尺度合計点高得点群を DBS で細分類すると、バランス群の対人態度が、これ以外の群と比べて良好であることも確認された。

尺度合計点と対人態度との関係は、従来指摘されている結果と同様である。また、DBS と対人態度との関係は、自己受容尺度合計点だけでなく、その内部バランス状態も対人態度に寄与することをあらわしている。さらに、IRI 差異点では、むしろ、DBS の方がより密な関係にあることも明らかにされた。このほか、基調特性レベルで対人態度における自己受容性の機能分担の仮説が提起された。

対人態度との関係に見いだされたことがらが、そのまま対人行動においても指摘できるとは言い難い。しかしながら、上述のような対人態度と対人行動との関係から、自己受容性の内部バランス状態が対人行動に何らかの影響をおよぼすのではないかということが考えられる。今後は、種々の対人場面を設定し、そのような場面設定下における対人行動と自己受容性、特にその内部バランス状態との関係について検討していく

ことが必要となろう。

同様に、本研究で提起された、自己受容性を構成する要因が対人態度において、それぞれ役割を分担しているのではないかという仮説についても、機会をあらためて検証を加えていく必要があろう。

引用文献

- Block, J. & Thomas, H. 1955 Is satisfaction with self a measure of adjustment? *Journal of Abnormal & Social Psychology*, **51**, 254—259.
- Fiedler, F.E., Blaisdell, F.J. & Warrington, W.G. 1952 Unconscious attitudes of sociometric choice in a small group. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, **47**, 790—796.
- 福山清蔵 1981 おかあさんはカウンセラー 日本・精神技術研究所
- 板津裕己 1986a 自己受容性の研究(3) 日本応用心理学会第 53 回大会発表論文集, 129.
- 板津裕己 1986b 自己受容性の研究(4) 一人関係観との関わりについて— 日本社会心理学会第 27 回大会/日本グループ・ダイナミクス学会第 34 回大会合同大会発表論文集, 211—212.
- 板津裕己 1989 自己受容尺度短縮版 (SASSV) 作成の試み 応用心理学研究, **14**, 59—65.
- 板津裕己 1993 自己受容尺度短縮版 (SASSV) 作成の試み (改訂稿) (未発表論文)
- 岩下豊彦 1988 対人好悪とその認知 金子書房
- Jahoda, M. 1958 *Current concepts of positive mental health*. New York: Basic Books.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフ, **14**, 東京大学出版会
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における対人態度の特質と発達傾向 教育心理 (日本文化科学社), **28**, 495—499.
- Mitchell, J.V.Jr. 1962 An analysis of the factorial dimensions of the Bill's Index of Adjustment and Values. *Journal of Social Psychology*, **58**, 331—337.
- 宮沢秀次 1979 青年期における自己受容の一研究 名古屋大学教育学部教育心理学科紀要, **25**, 105—117.
- 水原泰介 1984 社会心理学入門(第2版) 東京大学出版会
- 名城嗣明 1961 自己受容と他者受容の関係についての実験的研究 琉球大学教育学部研究集録, **5**, 49—64.
- 大出美知子・沢田秀一 1988 自己受容に関する一研究 一様相と関連要因をめぐって— カウンセリング研究, **20**, 128—137.
- 坂原 明 1986 態度・行動間の研究の発展とその現状 駒澤社会学研究, **18**, 53—61.
- Sheerer, E. 1949 An analysis of the relationship between acceptance of and respect for self and acceptance of and respect for others in the counseling cases. *Journal of Consulting Psychology*, **13**, 169—175.
- 式部 久 1983 ヒューマンイズムの倫理 勁草書房
- スミス, P.B (編) 岡村二郎 (訳) 1984 小集団活動と人格変容 北大路書房
- (Smith, P.B. (ed.) 1980 *Small groups and personal change*. Methuen & Co.)
- 田中信生 1988 魅力ある人間関係 いのちのことば社
- 上田吉一 1969 精神的に健康な人間 川島書店
- Walter, T. 1977 *Love yourself*. Downers Grove: Inter Varsity Press.
- (1993.8.18 受稿, '94.1.11 受理)

付 録

本論文で用いた自己受容尺度の概略と質問項目、および、対人関係テストのプロフィールを以下に示す。

1. 自己受容尺度 (板津, 1989, 1993)

a. 尺度合計点と下位尺度得点

本尺度は 5 因子から構成されている (以後、これらを下位尺度と記す)。

Fac. I : 生き方

Fac. II : 他者との関わり方

Fac. III : 情緒不安定でないこと

Fac. IV : 自信・自己信頼に欠けていないこと

Fac. V : 自分自身への満足感

尺度合計点と下位尺度得点は、それぞれ 5 段階、あるいは、3 段階評価 (高得点群・中位群・低得点群) をおこなう。

b. DBS (Distance Balance Score)

DBS は、個人の下位尺度得点のバランス状態をとらえることを目的としている。尺度合計点が同じであっても、下位尺度得点バランスが異なれば、全体としての自己受容状態が異なるのではないかという仮説から設けられた指標である。

DBS は、以下のように算出する。この指標も、尺度

合計点などと同様に、5段階評価、および、3段階評価をおこなう。

$$DBS = \sqrt{\Sigma(T\text{得点} - \text{平均}T\text{得点})^2 / \text{下位尺度数}}$$

c. SASSV 基調特性（上位因子）スコア

基調特性は、自己受容性のおおもとになる個人特性と考えられる。これは以下の2因子から構成される（なお、下位尺度と区別するために、ここでは特性という名称を用いる）。

特性Ⅰ：自己の行為・行動への受容的態度

特性Ⅱ：自己の行動基盤となる内面的な安定感

基調特性スコアの評価には、2因子の因子スコア（ z 値）を用いる。ここでは、特性Ⅰ、特性Ⅱの z 値もとに、

A群：特性Ⅰ $.0 \leq z_I$ ，特性Ⅱ $.0 \leq z_{II}$ ，

B群：特性Ⅰ $z_I < .0$ ，特性Ⅱ $.0 \leq z_{II}$ ，

C群：特性Ⅰ $z_I < .0$ ，特性Ⅱ $z_{II} < .0$ ，

D群：特性Ⅰ $.0 \leq z_I$ ，特性Ⅱ $z_{II} < .0$ ，

E群：特性Ⅰ $-.5 \leq z_I \leq .5$ ，特性Ⅱ $-.5 \leq z_{II} \leq .5$ の5群に分類する。これら5群の位置関係は、FIGURE 1のとおりである。

I：特性Ⅰ因子スコア，II：特性Ⅱ因子スコア

FIGURE 1 基調特性スコア評価モデル

d. 総合評価

SASSV では、尺度合計点と DBS を基に、以下のような9群別、4群別の総合評価をおこなう。

9群別評価

9群別評価は、尺度合計点3段階評価と DBS3 段階別評価を組合わせたものである。評価区分は、FIGURE 2のとおりである。

4群別評価

4群別評価は、上記9群別評価各群について、それぞれの群のもつ意味や特徴から再整理したものである。

この分類は、Locus of Control 尺度（鎌原ほか、1982）との関係から導き出されたものであり、仮説の段階である。今後、この評価法の有効性の確認、あるいは、改良を試みていくものとする。9群別評価と4群別評価の関係は、FIGURE 2のとおりである。

	低得点群	中位群	高得点群
バランス群	Ⅶ(7)	Ⅲ(4)	Ⅰ(1)
中位群	Ⅵ(8)	Ⅴ(5)	Ⅱ(2)
アンバランス群	Ⅸ(9)	Ⅵ(6)	Ⅲ(3)

(1)～(9)は9群別評価、Ⅰ～Ⅲは4群別評価構成下位群をあらわす

FIGURE 2 自己受容総合評価モデル

e. 質問項目

Fac.Ⅰ：生き方（5項目）

- 1 私は自分の意志で物事を決定できる
- 6 私は何事にも努力をおこたらない
- 13 私はたとえ失敗しようとも直面する問題に立ち向かう
- 17 私は絶えず新しい経験を取り入れて自己の成長と発展を図る
- 21 私は具体的な目標をにかけて実行してみようとする

Fac.Ⅱ：他者との関わり方（5項目）

- 2 私は現在の友人関係に満足している
- 8 私は社会的である
- 11 私は社会との関わりあいを失わない
- 18 私は人との付き合いが良い
- 22 私は他人を信頼できる

Fac.Ⅲ：情緒不安定でないこと（5項目）

- 3 私は他人の行為にすぐに批判的になる*
- 7 私は落ち着きがない*
- 14 私は衝動的になりやすい*
- 19 私は感情的になりやすい*
- 23 私は人をおさえつけようとする傾向が強い*

Fac.Ⅳ：自信・自己信頼に欠けていないこと（5項目）

- 4 私は必要以上に反省する傾向がある
- 9 私は自分が正しいと思ったことでもなかなか主張できない*
- 12 私は他人の意見に左右されやすい

15 私は神経過敏である *

のとおりである。

24 私は過度に遠慮がちである *

Fac.V : 自分自身への満足感 (5項目)

5 私は自分が好きである

10 私は現在の自分に満足している

16 私は現在の親子関係に満足している

20 私は自己の体質改善を図りたい *

25 私の心はくつろいだゆったりとした状態にある

* 逆転項目

2. 対人関係テスト (福山, 1981)

対人関係テストの受容—拒否, 接近—回避の2軸, 2軸によって仕切られた4領域 (見守り, 密着, 批判, 諦め), さらに, 4領域を構成する8カテゴリー (観察, 配慮, 期待, 一体感, 攻撃, 干渉, 妥協, 閉鎖) の位置関係は, FIGURE 3

FIGURE 3 対人関係テストプロフィール